

活動の場所

artienceグループの国内の製造所



活動目的

artienceグループは、さまざまな原材料、エネルギー、水などを使用して製品を生産・提供するとともに、その生産の過程でCO2、化学物質、排水、廃棄物などを発生させることにより、環境に負荷を与えています。国内の製造所では、排出される化学物質の周辺の生態系への影響を確認し、低減することを目的として活動しています。

活動内容

artienceグループ（旧東洋インキグループ）は、生物多様性の重要性を早くから認識し、2009年5月には「東洋インキグループ生物多様性に関する基本方針」を制定し活動を行っています。

【主な活動】

1. WET（Whole Effluent Toxicity）による製造所排水の環境影響評価

artienceグループは、国立環境研究所と共同で、藻類・ミジンコ・魚類などを用いて排水の毒性を定量的に評価するWETによる環境影響評価を2007年度から継続して行ってきました。その結果、一部の製造所でTU（Toxicity Unit、毒性単位）が10を超えることが認められましたが、排水の河川などへの放流条件を考慮すると生物への影響はほとんどないと判断されています。

2. 社有林の生態系調査と貴重種の保存活動（トーヨーケム（株）川越製造所）

川越製造所の周辺には、江戸時代の元禄期に開拓された「三富新田」の一部である帯状にまとまった樹林地がみられ、川越製造所の社有林との連続性も認められています。2016年、2017年に実施した調査では、植物169種、鳥類24種、動物3種の存在が確認され、その中には、保護上の重要な種に該当するシュンラン、アオゲラ、ホオジロも含まれています。川越製造所では、シュンランの保護活動を行うとともに（上記の写真）、社有林の生態系の保全に努めています。

3. 生物多様性に関連した団体への参画

経団連生物多様性イニシアチブ／クリーン・オーシャン・マテリアル・アライアンス／30by30アライアンス

PRしたいポイント

artienceグループは、国内の主要な生産拠点である製造所において、製造段階での自然との接点（OUTPUT）が、周辺の河川や樹林地の生態系に与える影響を見える化して、低減を図っています。WETの結果に基づき、TU低減のため生物影響の原因と考えられる有機化合物の分解方法の検討などを行いました。また、川越製造所の社有林では、製造所から排出されるVOCの影響も確認しています。

活動効果、今後の展開 等

国内外の事業所について生物多様性評価ツールであるIBAT（Integrated Biodiversity Assessment Tool）を用いて、生物多様性の重要エリアの近接状況を調査しました。また、Aqueduct Water Risk Atlasにより沿岸域の富栄養化ポテンシャルが著しく高いと評価された事業所についても、生物多様性への影響が大きいと判断しています。これらの結果に基づき、生物多様性の保全活動を優先的に取り組む事業所を特定し、活動の強化を図っていきます。